

2020年10月26日

熊本県知事 蒲島郁夫様
八代市長 中村博生様
人吉市長 松岡隼人様
芦北町長 竹崎一成様
錦町長 森本完一様
あさぎり町長 尾鷹一範様
多良木町長 吉瀬浩一郎様
湯前町長 長谷和人様
水上村長 中嶽弘継様
相良村長 吉松啓一様
五木村長 木下丈二様
山江村長 内山慶治様
球磨村長 松谷浩一様

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 共同代表 岐部明廣
美しい球磨川を守る市民の会 代表 出水 晃
子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会 代表 中島 康

球磨川流域治水協議会に関する要請書

報道によりますと、球磨川流域治水協議会が10月27日に開かれるとのことで、私たちは大変驚いています。10月6日に、わずか2回の会合で終了した球磨川豪雨検証委員会の検討内容は、豪雨被災者や住民の実感とも、また多くの研究者の意見とも大きく相違するものでした。その結果に基づき治水対策を協議することに、私たちは国土交通省に対し強く抗議しました。

私たちは、同検証委員会の検討内容について、10月12日に「球磨川豪雨検証委員会に関する公開質問状」を提出しました。10月20日の熊本県による「住民の皆様への御意見・御提案をお聴きする会」における、「球磨川豪雨検証委員会に関する公開質問状」に対する口頭での回答は、住民の疑問に真摯に答えようとする姿勢は全く感じられませんでした。問題をすり替えたり、都合の悪い点には答えなかったり、「洪水流量や川辺川ダムがあった場合の効果について科学的な検証はなされたのか」との質問については、「国交省八代河川国道事務所のホームページに掲載された参考資料を見よ」との姿勢でした。

公開質問状では「住民が理解できるように説明すること」と述べていたにもかかわらず、同ホームページに掲載された合計200ページもの「参考資料」を見ると、専門的な表やグラフばかりで、被災者や住民が理解することは到底不可能です。また、資料の元データなどが示されていないので、国土交通省の見解の是非を判断することができません。これでは国土交通省は、説明責任を果たしたとは言えません。国土交通省に説明責任を求められることを強く要請します。

今次豪雨災害の検証と、今後の具体的な治水対策は、豪雨被災者のためになされるものであるはずですが、被災者の意向を把握しないまま次の段階にことを進めると、流域にさらなる混乱や対立を生みだし、球磨川の洪水防止対策をさらに遅らせることとなります。

今後、国土交通省は、流水型ダム（穴あきダム）を検討に加えると思われます。全国で運用されている流水型ダムの「穴」の上流側には、穴（トンネル）の中に流木等が入らないように、すき間が20 cmのスクリーン（金網のような柵）が設置されます。川辺川ダムの集水域は470 km²もあり、洪水時は大量の流木や岩石、土砂などがこの穴に押し寄せ、穴を覆うスクリーンがふさがり、洪水調節できなくなることが十分考えられます。

また、流水型の川辺川ダムの穴（トンネル）の長さは100m程度となり、魚族などの遡上はできなくなります。洪水時はダムの上流に砂や礫を大量にため込み、下流への砂や礫の供給はなくなり、ダムの下流は岩盤の露出や濁りの長期化など、河川環境に致命的なダメージを与えます。

川辺川上流にある「穴あきダム」である朴ノ木砂防ダムは、洪水時に大量の土砂をため込み、洪水が終わった後も流水型ダムであるために、ダム上流にたまった土砂が露出し、たまった土砂が流れ出し、長期間下流の川辺川と合流後の球磨川を濁しました。高さ25mの朴ノ木砂防ダムでもこの有様です。高さ108mの川辺川ダムができれば、さらに濁りが長期化し、川辺川は死の川となります。この件は、大熊孝新潟大学名誉教授の資料をご参照ください。

<http://kawabegawa.jp/ogt/ookumareport2020.10.13.pdf>

今後なされるべきことは、治水に関する議論だけではなく、地域の復興に関する議論です。現在の球磨川・川辺川があつてこそその地域の復興です。今後、治水の議論を進める上でも、復興を前提とした議論がなされるべきです。

私達は国土交通省に対し、豪雨被災者や住民の意向も把握しないまま、被災者や住民の意見も聞かないまま、住民からの公開質問状にも真摯に答えようとしないうまま、住民に説明責任を果たさないまま、具体的な治水対策の協議に入ることに強く抗議しました。

熊本県知事及び流域市町村長のみなさまは、下記5点が実施されるまで、球磨川流域治水協議会を開催しないことを国土交通省に求めることを、強く要請します。

記

1. 国土交通省は、10月12日付の「球磨川豪雨検証委員会に関する公開質問状」の項目ごとに文書で回答するとともに、住民と対面して口頭でも説明すること。住民の再質問にも真摯に答え、説明責任を果たすこと。
2. 国土交通省は、球磨川豪雨検証委員会のメンバーに、豪雨被災者や、これまで流域の治水対策を求めてきた住民団体、河川工学の専門家を加え、今次豪雨の検証をやり直すこと。検証結果を球磨川流域の各所で住民にわかりやすく説明すること。
3. 国土交通省は、豪雨被災者全員に、今後どのような対策を望むのか、意向調査をすること。
4. 国土交通省は、球磨川流域治水協議会のメンバーに、豪雨被災者や、これまで流域の治水対策を求めてきた住民団体、河川工学の専門家を加えること。
5. 国土交通省は、流水型ダムの環境への悪影響などについて詳しく説明すること。

以上

【本文書に関する連絡・問合せ先】

子守唄の里・五木を育む清流川辺川を守る県民の会
熊本市西区島崎 4-5-13 中島康 電話 090-2505-3880

【資料】

■流水型ダムは洪水時、流木等で穴を覆う金網がふさがり洪水調節できない



益田川ダムの穴の上流側に設置されたスクリーン



流木でふさがった大津町の取水ぜき 2012年7月

流水型ダムの「穴」の上流側には、穴の中に流木等が入らないように、すき間が20cmのスクリーン（金網）が設置される。川辺川ダムの集水域は470km²もある。洪水時は大量の流木や岩石、土砂などがこの穴に押し寄せ、穴がふさがり、洪水調節できなくなることが十分考えられる。

■流水型ダム（穴あきダム）で川辺川は「死の川」となる



川辺川上流の朴の木砂防ダム上流にたまった土砂



長期間、川辺川は濁ったままだった(相良村平川)

流水型の川辺川ダムの穴（トンネル）の長さは100m程度となり、魚族などの遡上はできなくなる。洪水時はダムの上流に砂や礫を大量にため込み、下流への砂や礫の供給はなくなり、岩盤の露出や濁りの長期化など、河川環境に大きなダメージを与える。

川辺川上流にある朴ノ木砂防ダム（穴あきダム）は、洪水時に大量の土砂をため込み、洪水が終わった後も流水型ダムであるために、たまった土砂が露出し、今度はたまった土砂が流れ出し、長期間下流の川辺川と球磨川を濁した。高さ25mの朴ノ木砂防ダムでもこの有様。高さ108mの川辺川ダムができれば、さらに濁りが長期化し、川辺川は「死の川」となる。